

「ポーク政権におけるジョージ・バンクロフトの役割」

江 川 良 一

THE ROLE OF GEORGE BANCROFT IN THE POLK ADMINISTRATION

Ryoichi Egawa

There has been a high regard for George Bancroft as a radical Democrat of the 1830s. In spite of this practical aspect, he has also been regarded as the authoritative representation of the Expansionism of the 1840s. Despite this historical significance, very little importance has been attached to the study of Bancroft as the secretary of the Navy under the Polk Administration and, consequently, the number of serious studies on this subject is very small. The purpose of this paper is to fill this academic vacuum. What role did Bancroft play in what incident? How did he rationalize the apparently contradicting two ideas, his democratic belief in the 30s and his passion for expansionism in the 40s? This paper will examine the way he handled a series of foreign policy questions and try to evaluate the contributions he had made and the limitations he has faced arising from his idealistic political attitude.

Received Mar. 15, 1989

Key words: The Secretary of the Navy, Oregon Negotiation,
The “tripartite” plan, Commodore John D. Sloat.,
Transcendentalism,

はじめに

1840年代に入り、アメリカの政治の動向、国民一般の関心が、それに先立つ30年代のそれとは大きく変わり始めていたことは周知の通りである。即ち、ジャクソニアン・デモクラシーの名で呼ばれる反特権的民主化運動への情熱に代る、領域的膨張主義への、急激な関心の高まりがそれであった。その動きには当然のことながら、セクション間の利害関係や奴隷制拡大の是非を廻る対立が絡み、45年に復活せる民主党政権は、これらの問題に対処しうる、30年代とは幾分傾向の異なった人々の手に、そのリーダーシップを委ねたのであった⁽¹⁾。どのような原因がこの変化をもたらしたのか、あるいは、その変化はどう展開しどのような形で推移したのかなどと言う、全体的な説明はすでに為されており、それぞれに相応の説得力を持つものであると言ってよい。しかし、一度この疑問を個人レベルに移し

て考察しようとするれば、この変動期を貫いて生き、その双方の年代においてそれぞれ個性的な活躍を示した特定の個人が、この変化を内面においてどう受止め、実生活においてどう対処して行ったかという問題は、また別の興味ある課題を提供しているように思う。その意味では、30年代に「コモン・マン」の権利を主張するラディカリストとしての名声を拍しながら、膨張運動のピーク時において海軍長官兼陸軍長官代理となり、軍事面の一切の権限を行使した人物、ジョージ・バンクロフトの如きは、最も興味ある存在の1人と言えるのではないであろうか。

彼は後年の史家達によって、40年代の活躍の故に、膨張主義の権化の如くに扱われることが多かった。例えばヴァン・アルスタインは彼を、「強力なテキサス、もっと強力なオレゴン」の民主党綱領の鼓吹者⁽²⁾として描き、T・H・ヒッテルは「カリフォルニア併合における最大の貢献者⁽³⁾」、H・ウィッシュは「カリフォルニア併合欲求の第一人者⁽⁴⁾」とも評したのである。しかしながら、このような果敢なイメージは、少なくとも30年代までの彼の経歴や、その主たる活動傾向からは湧いて来にくいと言えよう。大体、従前のバンクロフトの名を高からしめたものは、直接には膨張にも、勿論軍事にもほとんど関りのない分野での活躍であった。それは第1に、34年発行の名著「合衆国史」第1巻による歴史家としての成功であり、第2には、出遅れていたマサチューセッツ州の「コモン・マン」を組織化し、反特権運動の先頭に立ってジャクソニアン・デモクラシーを盛り上げた、州デモクラットの領袖としての名声であった。1840年の大統領選挙に敗れて民主党自体が混乱し、自己撞着に陥った段階ですら、彼は民主勢力の復活・再統合という、従来の国内的問題への関心に執っていた。そのためにこそ、銀行闘争後の混迷する金融政策の事後処理に奔走し⁽⁵⁾、一方では州党組織の内紛調整に努めつつ、懸命にジャクソニアン的連合戦線の維持を計ろうとしていたのである。この間彼は、著述に演説に、独自のトランセンデンタルな哲学に基づく、強烈な民主主義的信念を吐露し続けている。しかしそれは若き日のドイツ遊学の影響もあって、語り口にはむしろコスモポリタンの傾向が濃厚であり、後半の閣僚時代の動きとは、一見相反するものの如くにも見えるのである。

「人類世界はばらばらの形で存在するものではなく、1つの国が孤立した存在であることも出来ない。全ての人間は兄弟であり、全ての人は他の人に対しての下僕である。全ての国民もまた兄弟であり、そして各々の国民はどの国民に対しても、排斥の圧力を加えることのない、連合的人類に対して責任を負っているのである……⁽⁶⁾」

右は、国家系の把握の仕方において正に旧師アーノルド・ヘーレン的であり、その姿勢において平和的かつ人類愛的言辭と言えよう。その限りにおいてバンクロフトは、教育改革、文芸評論、歴史学などの分野に本領を発揮せんとした、本質的には学者肌の政治家だったのである。

1845年、そのようなバンクロフトが新生ポーク政権の海軍長官に挙げられたことは、本人にとっても、同時代の有識者達にとっても、意外の感をまぬがれぬものであったに違いない。それどころか、史家G・ヴァン・デュウセンですら、この閣僚人事の寸評においては、「バンクロフトは、そのポストに価する資格をほとんど欠いていた⁽⁷⁾」と、一言で片付けている始末である。その人選に対する反対が決して無くはなかったにもかかわらず、ポークがその任命に固執したのは何故であろうか。考える主たる理由はスポイルズ・システムの原則であろう。1844年、バンクロフトは、ボルティモアにお

ける全国党大会において、苦心の工作の末ポーク担ぎ出しに成功し⁽⁸⁾、彼をして大統領選挙史上最大のダークホースたらしめたのであった。デッド・ロックに乗上げた党を救うためとはいえ、彼は結果として年来の盟友M・ヴァン・ビューレンを見捨てた形となり、その一派の多くの党人の怨を買うという犠牲を払ったのである⁽⁹⁾。ポークが何らかの報酬を考えたのも当然といえるであろう。バンクロフト自身が決して望んだものではなかった⁽¹⁰⁾だけに、そのポストが何故に海軍長官であらねばならなかったのかは些か不明瞭ではあるが、幾つかの理由が推測出来なくはない。まず、在来のアメリカの小艦隊主義の伝統からして、海軍長官職は必ずしも最重要ポストとは云えず、役職配分上、海軍省の規模やウェイトが、彼のような初任者には適当と判断されたのではないかという点が考えられよう。次に積極的理由として、バンクロフトがニューイングランドの啓蒙的文化人として、閣僚候補の誰よりも海外事情に明るい点を買ひ、当時すでに問題化していたテキサス、オレゴンを廻る英・仏の動向に、適切に対処しうるであろうとの期待がかけられていた事、更には2度に渡るボストン収税関長としての経験から海事知識にも富み、省内の改革や、後にアナポリス兵学校として結実するような中堅将校の育成にも、充分貢献しうるとの見込があった事などが挙げられてよい。この任命が単なる論功行賞ではなく、ポークの信頼が相当なものであったことは、就任直後の一日、バンクロフト1人を招いて、任期中の4大目標を密かに打ち明けたという一事⁽¹¹⁾をもってしても明らかであろう。

ともあれ彼は、ポーク政権の軍事担当者として、高まりゆく膨張主義政策の最先端に立つことになった。この後彼は、具体的にどの問題にどのように関わり、どのような姿勢でそれら进行处理しようとしたのであろうか。そしてその結果、彼の貢献の度合はどの程度のものとして評価されるべきであらうか。また、従来のキャリアからは異様とも思える分野でのこの時期の積極性は、偶然の職務にただ忠実であっただけのものなのか、それとも何らかの利害、あるいは自らの信念などと深く関わるものであったのか。大体彼は、30年代までの民主々義的信条とこの時期の膨張主義的情熱とを、その内面においてどのように整合させようとしていたのであろうか。これらの諸点を解明するためにも、さし当ってこの時期のバンクロフトの言動を、更に詳しく検討してゆきたいと思う。

註

- (1) Glyndon G. Van Deusen, "The Jacksonian Era. 1828—'48." 1959. pp.170—171, p.192.
- (2) R・W・ヴァン・アルスタイン著（高橋章他訳）「アメリカ帝国の興隆」1960年、162—163ページ。
- (3) Theodore H. Hittell, "George Bancroft and his Services to California. Memorial Address, May 12, 1891." The California Historical Society. p.7. (以下、Memorial C.H.S. と略す)
- (4) Harvey Wish, "The American Historian." 1960. p.76.
- (5) 拙稿、「初期西部銀行業におけるドゥワイト一族」(II) 岐阜教育大学紀要、第8集。1981年。28—31ページ参照。
- (6) H. Wish, op. cit., p.79.
- (7) G. G. Van Deusen, op. cit., p.195.
- (8) Cf, Ibid., p.185. A. M. Schlesinger, Jr., "The Age of Jackson," 1946. pp.436—437. Lilian Handlin, "George Bancroft The Intellectual as Democrat." 1984. p.191. etc.
- (9) Martin Van Buren to G. Bancroft. March 7, 1845. "Van Buren—Bancroft Correspondence, 1830—1845." Massachusetts Historical Society. Proceedings. XL11, June, 1909. (以下、M.H.S. Proceedings と略す) pp.439—440.

この書簡に見られるヴァン・ビューレンの怨みがましき非難口調はこの党派一般の感情を示す1例である。

- (10) M. A. DeWolfe Howe, ed., "The Life and Letters of George Bancroft," Vol.1. 1970. p.259, p.262. (以下, D. Howe, Letters と略す)

1844年, 12月初, バンクロフトは「モービル・レジスター」紙の記者に, 「私が閣僚の地位を欲しない理由は沢山あるが, 中でも私の文学上の追求を大きく妨げるであろうという点が大い。 (あえて任命を受けるとすれば) 外交上の職務の方が私の意向に適うものである」と答えている。又, 45年1月1日にはポークに対しても同趣旨のことを告げ, 近い将来, プロシアへの使節となる事を希望している。

- (11) G. Bancroft, "Biographical Sketch of James K. Polk." cited from C. G. Sellers, James K. Polk, Continentalist: 1843—1846. 1966. p.213., James Schouler, "History of the U.S.A. Under the Constitution." IV. 1880—1913. p.498. cited from A. M. Schlesinger. Jr., The Age of Jackson, 1946. p.441., G. G. Van Deusen, op. cit., p.196., L. Handlin, op. cit., p.212., Russel B. Nye, "George Bancroft: Brahmin Rebel," 1944. p.137.

この時ポークが示した4大目標とは, (1)オレゴン問題の解決, (2)カリフォルニアと太平洋沿岸地域の獲得, (3)関税の引下げ, (4)独立国庫制の再確立であった。

第1章 入閣以前の膨張主義的関心

ポーク政権の軍事担当閣僚としてのバンクロフトの活躍は, 従来の研究ではとかく軽視されがちであり, 二義的に扱われがちであったと言ってよい。それだけに, 改めてこの時期のみに光を当てて見る時, 膨張主義政策に対する彼の積極的な姿勢は, いかにも唐突な印象を与え, 意外な局面への予想外の関与ぶりに, 驚きの念をすら抱かせかねない。この意外感の因は, もとより30年代までの彼の活動が, あまりにも国内の民主的統合の面においてのみ, 強調されすぎて来たという事情に負うものであろう。しかし, W・F・クレイヴンらが指摘するこの「ナショナリズムの使徒⁽¹⁾」が, 40年代に至って突然に誕生したはずのないことは言うまでもあるまい。この時期以前にも必ずや何らかの形で, その兆候となるべき言動が見られたはずである。とすればそれは, 一体どのような場面で, どのような形のものとして認められるのであろうか。

その点に関して大方がまず想起するのは, 1834年にその第1巻が発行された, かの著名な「合衆国史」の内容であろう。それは確かに, 当時の人々に「ジャクソンに投票した」と感じさせた程の, 強烈な民主主義の讃歌には違いがなかった。しかし同時にそれは, ピューリタンの選民意識に基づく, アメリカの国民的正義の勝利の礼讃であり, その故にこそ, 40年代の「明白なる天命」思想に直結しうる, 華麗なナショナリズムの表現でもあったのである。「彼の作品はアメリカのナショナルティの正義の偉大な防壁であり, その自得のアメリカニズムによって, 独立戦争に対する我々の最も熱烈な弁明を記すものであった……⁽²⁾」とは, 後世の1史家の評言であるが, 正にその一方的な強調こそ, 逆にこの作品最大の弱点と指摘される程の特徴⁽³⁾だったのである。この他にもバンクロフトの著作上, ナショナリズム強調の例は枚挙に暇がないと言ってよい。それらの具体的例証は他の機会に譲るとしても, 問題はそれらの表明が, 彼のラディカル・デモクラットとしての活躍期と略々併行している点にある。即ち彼は, 決して30年代の民主主義者から40年代の膨張主義者へ轉身したわけでもなく, 内面での彼の思想が変化したわけでもないということである。換言すれば, 双方の時期の2つの姿勢は, 元々彼の基本思想という同一根より発した盾の両面に過ぎないのであり, その根底にあるものこそ, 若き日の

ドイツ留学以来営々と練り上げられた、独自のトランセンデンタリズム哲学に他ならないと言ってよいであろう。その哲学体系の凡その完成形は、1835年のウィリアムズ・カレッジにおける演説の中に見出しようと考へたい⁽⁴⁾。バンクロフトは、この思想的根拠の成熟を待って初めて政界に転進したのであり、この時期以前に、彼の現実即応的な膨張主義の主張が見られないのは、むしろ当然であろう。この時点までの彼の愛国的関心は、専ら著作の中にのみ向けられていたのであるから。とすれば、彼の同時代的、実践的関心は何時頃から現れて来るのであろうか。海軍長官就任以前の彼の対外的言動について、些か整理してみる必要があるように思う。

今、バンクロフトの本格的な政治活動の開始期を、民主党への正式入党の1836年と想定するとすれば、彼の膨張主義的言動は、既にその当初から示されていたと言ってよい。例えばまづ、紛争の続く英領カナダとの国境問題に対する関与が挙げられよう。折しも上・下両カナダでは、それぞれ「ファミリー・コンパクト家族盟約」・「シャトー・クリーク城砦関」と呼ばれた、少数の実質支配階層に対する住民の不満が高まっており、公正な土地政策や、アメリカ式の選挙制度を求める民主的改革運動が、反乱の一步手前まで深刻化していたのである。その1837年の夏、バンクロフトはモントリオールとケベックを訪れ、下カナダ改革派の領袖達⁽⁵⁾と接触している。この時、両者の間にどのような話合と暗黙の了解があったかは不明であるが、バンクロフトが大統領ヴァン・ビューレンや、財務長官リーヴァイ・ウッドベリーと自由に通じ合える仲であることを彼らに理解させ、彼らの反政府闘争を密かに激励したらしい事は略々確実である。同年11月の反乱失敗の後、流亡のリーダー、ルイ・J・パピノーから彼に宛てた書簡⁽⁶⁾は、その間の事情を推察させる有力な手掛りとなるであろう。この書簡は、まず下カナダ政府の不当な弾圧が如何にして彼らを反乱に追い詰め、かつ如何に無惨な鎮圧を行ったかの経過を述べた後、亡命の「愛国者達」の、カナダへの武力再侵攻計画に対する、合衆国の援助を要請したものであった。特にヴァン・ビューレンを名指しし、彼とその周辺の人々の理解と同情を求めている点、更には、「マスケット銃1万丁と大砲20門、それを操作する義勇兵を整えるための10万ドルの資金⁽⁷⁾」という、要求内容の具体性などから見ても、合衆国の助力に対する彼らの期待の大きさがうかがえよう。彼らにかほどの計算を立てさせた以上、それ相応の、事前の何らかの言質めいたものの存在を推測するのは、あながち不自然なことではあるまい。バンクロフトが何故に、この下カナダの反乱に敢えて関与したのかという理由は、やはり彼の基本思想によって説明しうる部分が多い。パピノー書簡中にも見られる「栄光と幸運を有する合衆国の、26州に実在するような自由で純正な民主的憲法を確立し、かつ守り抜くための戦」とか、「我々は貴国の父祖達が、独立革命中に陥っていたと同様の形勢下におかれ、同様の危険に身を晒している」とかの訴え⁽⁸⁾は、彼の民主的信条を刺激し、不遇の愛国者達に対する、純粋な同情をつのらせたことは容易に推察される点である。しかしその一方では、「貴国に近く、イギリスからは遠いこの大陸のこの地域(＝下カナダ)との、通商関係や政治的連合の中に見出される貴国の利益⁽⁹⁾」を約束しようとする、パピノー一派の誘いにも見られる如く、セント・ローレンス流域から大英帝国を締出し、そこにアメリカの影響下にある1共和国を置き替えるチャンスを見出さんとした、ナショナリスティックな思惑があったことも亦、見逃しえない点であろう。この37年の暮には、上カナダでも類似のW・L・マッケンジーの乱が起っている。米・加両不正規軍間に「キャロライン号事件」や、「サー・ロバート・ピー

ル号焼打事件」などの小競り合いがあり、米英間の緊張が高まった年であった。しかしバンクロフトは、その頃には事のなりゆきを冷静に見透すようになっていた。彼は両カナダでの反乱基盤の意外な脆弱さと一般住民の保守的体質を見抜き、12月20日付のパピノーへの返信では、むしろ彼らの武力計画の無謀さをいましめ、深い同情を示しつつも援助を断っているのである⁽¹⁰⁾。翌38年の1月5日、及び11月21日の、2度に渡る合衆国政府の中立宣言発令の措置を見れば、彼の対処の仕方は正に時宜に適うものであったと言えよう。

バンクロフトの注目は、英領ニューブランズウィックとメイン州との国境紛争にも向けられていた。1839年2月には、所謂「アールストウック戦争⁽¹¹⁾」と呼ばれる事件が発生し、3月、両者間の調停を計ったヴァン・ビューレンは、その解決を両国代表による国境委員会に委任した。この問題は結局、42年のウェブスター＝アシュバートン条約によって結着を見たものである。それまでの間バンクロフトは、終始アメリカ側の主張すべき点をヴァン・ビューレンに献言し、41年に政権がホイッグに移った後は、国務長官D・ウェブスターのその扱い方に、深い懸念を表明していたのである。39年3月の休戦直後、ドイツ人地理学者エベリングの論文に基づき、英領との境界をセント・ジョン河の北に設定すべきことを主張した書簡⁽¹²⁾、42年の米英交渉中、ウェブスターに対する疑惑、あるいは不信を表明せる幾つかの書簡⁽¹³⁾などは、この問題に関する彼の関心の深さを立証するものと言えよう。

バンクロフトが注視していたこのウェブスター＝アシュバートン交渉は、実現を見なかったとはいえ、既にロッキー以西の所領分割問題まで、一応紐上にあげていたという点でも、重要視されねばならない。その場で検討された所謂「3者構成プラン⁽¹⁴⁾」は、後のテキサス併合、オレゴン協定、カリフォルニア占有という一連の領土的膨張の成果に、大きな変貌を与えていたかも知れない内容を持つものであったからである。

「……（君は）ウェブスターが国務長官時代に、太平洋までのわが国の領域拡大のために、メキシコと交渉を試みていたことを知っているだろうか。これは事実である。彼はわが領域内にサンフランシスコを含め得るに十分なメキシコ領の購入を望んでいた。太平洋岸のニュー・スペインの渺たる断片をではない。君はこの事実を恃んでもよい。私は彼が（この事を条件として、）アシュバートンとのオレゴン問題を解決しようとしたに違いないと確信している……⁽¹⁵⁾。」

バンクロフトのこの文自体は、1844年の大統領選挙戦に当って、テキサス併合論に峻巡を示していたヴァン・ビューレンに、忠告を与えるためのものであった。しかしその内容からは、42年当時、すでに彼が「3者構成プラン」の策動を察知していた事、彼自身がその頃には太平洋岸への膨張志向を有していた事、それに関して、同じメキシコ相手のテキサス併合にも積極的であった事などが、明らかに看取されるように思うのである。

この1837年から44年にかけての時期は、同時にラディカル・デモクラットとしてのバンクロフトが、その民主々義的政治活動に最も情熱を燃焼させた時期でもあった。37年には、周知の「正貨支払令」を1つの契機とした長期不況の中で、彼は硬貨論と独立国庫制推進を唱え、ジャクソンによる銀行闘争の成果を防衛しようと、必死の努力を傾けていた⁽¹⁶⁾。38年にはボストンの収税関長となり、州内の党勢拡大に手腕を発揮し、かのシュレジンガー・Jrの言う「マサチューセッツ・ラディカリズム」の

最盛期を演出して見せていたのである⁽¹⁷⁾。41年以後は、当面のホイッグのみならず、州内にも伸びて来たタイラー＝カルフーン系の別派勢力の策動にも対抗して、民主的連合戦線の維持に努めねばならなかった⁽¹⁸⁾。前述の如き、カナダの反乱、アールストウック戦争、ウェブスター＝アシュバートン条約、テキサス併合——等の、一連の領域問題に対する彼の関与や注目、右のような政治活動の中で、同時に示されたバンクロフトの別の側面であり、彼のような理想的政治家の場合には殊に、その依拠せる信条が本来内包せる、2つの側面の現われとして解すべきではないであろうか。

民主党のその後の命運をヴァン・ビューレンの再登場に賭けていたバンクロフトは、1844年の大統領選挙戦には、マサチューセッツ州の彼に対する一致した支持票を握って、ボルティモアの党大会に臨んでいる。彼の唯一の不安は、肝心の立候補者のテキサスに対する姿勢の曖昧さであった。彼は大会開催月の5月2日にもヴァン・ビューレンに書簡を送り、「……私はもう少しテキサスの諸権利に賛成し、メキシコの要求に反対した方がよいと思う⁽¹⁹⁾」と、はっきりと忠告していたのである。彼の不安は適中し、絶対有利であったはずのヴァン・ビューレンは、指名に必要な3分の2の投票を得られず、紛糾を重ねた大会はデッド・ロックに乗上げた。この時点において彼がヴァン・ビューレンを見限り、ギデオン・ピロウ等と共にJ・K・ポーク担ぎ出しに転じたのは、単に党の目前の分裂を回避するためという、単純な御都合主義のみに帰せらるべきではない。数年後、A・ジャクソン追悼の辞に托して語られた、彼のターナー的西部への期待の熱情から見ても⁽²⁰⁾、テキサス問題は曖昧に見過ぎてよいものではなかったのである。領域拡大をアメリカ全国民の再起のチャンスを見なし、それ故に奴隷制問題との相関々係を極力否定しようとしていたバンクロフトにとって、テキサスへの奴隷制拡大の権利を内外に公言していたカルフーンや、それへの対抗感情から、北部的主張にこだわり続けるヴァン・ビューレンの態度は、ただ腹立たしいものであったに違いない。その点ポークは無名ではあっても比較的自由的独自の考え方を有しており、硬貨論や独立国庫制に関しても、バンクロフトとは相通ずる点が多かったものと思われる。

1845年に成立した新政権には、カルフーン一党も、ヴァン・ビューレン一派も除外してみせたポークの姿勢は、その意味でも注目されるべきであろう。バンクロフト自身、在任中に大統領と意見を異にすることはほとんどなかったし、後々まで、事に臨んでのポークの態度を折に触れて讃えることが多かったのである⁽²¹⁾。政界入りの当初から現われ続けていた、彼の民主的信条に基づく膨張への関心は、このポークとの結びつきを得て、公的なものとして開花したと言ってよいであろう。

註

(1) Wesley F. Craven, "The Revolutionary Era.," from *The Reconstruction of American History*. edited by John Higham. 1962. p.47.

(2) Hans Kohn, "American Nationalism: an interpretative essay." 1961. p.41.

(3) 今日の観点において彼の「歴史」が幾多の欠陥を指摘されるのは当然であるが、発表当時にも、J・Q・アダムズ等を始めとして、「事実の不完全さ」、「客観性の欠如」等を批判する声があった。後年M・クラウスは、「その誇大で無批判なアメリカニズム」を特に指摘している。

Michael Kraus, "The Writing of American History." 1953. pp.122—126.

(4) 拙稿、「ジョージ・バンクロフト研究序説」西洋史学、第84号。1970年。55—61ページ参照。

- (5) この改革派のリーダー達としては、L・J・パピノーの他に、W・ネルソン、T・S・ブラウン、A・ギロード等の名がある。

Lillian F. Gates, "A Canadian Rebel's Appeal to George Bancroft: Memoranda and Documents." *The New England Quarterly*, XLI, 1968. p.96.

- (6) L. J. Papineau, to G. Bancroft. Albany, Dec. 18, 1837. cited, *Ibid.*, pp.98--103.
 (7) *Ibid.*, pp.101--102.
 (8) *Ibid.*, p.101.
 (9) *Ibid.*, p.101.
 (10) G. Bancroft to L. J. Papineau. Springfield, Mass, Dec. 20, 1837. cited *Ibid.*, pp.103--104.
 (11) 実情は不明確な境界が生んだ双方の木材業者間の私闘であったが、ニューブランズウィック側が、メイン州の役人ルーファス・マッキンタイヤーを捕えた事により、公的事件となった。ヴァン・ビューレンは、W・スコット将軍に両者間の調停を命じ、3月23日、休戦協定が成立した。
 (12) G. Bancroft to M. Van Buren, Boston, March 26, 1839. op. cit., *M.H.S. Proceedings*, p.385.
 (13) G. Bancroft to M. Van Buren, Boston, Feb. 21, 1842. *Ibid.*, pp.391--393. etc.
 (14) これはオレゴン問題解決の1案としてD・ウェブスターが英代表アシュバートン卿に提示されたものである。その骨子は、アメリカは、太平洋岸の北緯37度30分以北の割譲をメキシコに要求する。イギリスはこの割譲を黙認する。その見返りとして、アメリカは、イギリスの提案しているコロンビア河でのオレゴン分割ラインを受入れる……というものである。
 A. B. Ashburton to G. H. Aberdeen, Washington, Apr. 25, 1842. cited Frederick Merk, "The Oregon Question in the Webster=Ashburton Negotiations." *Mississippi Valley Historical Review*, XL111, 1956. pp.394--395.(以下、Negotiationsと略す)
 (15) G. Bancroft to M. Van Buren, Boston, Mar. 28, 1844. op. cit., *M.H.S. Proceedings*, p.421.
 (16) 拙稿,「初期西部銀行業におけるドゥワイト一族」(II) 岐阜教育大学紀要, 第8集。1981年。23--31ページ。
 (17) A. M. Schlesinger, Jr., "The Age of Jackson." 1946. pp.159--176,(Chap. X111, George Bancroft and Radicalism in Massachusetts.)
 (18) 拙稿,「マサチューセッツ州におけるジャクソニアン運動」史林, 51巻3号。1968年。76--79ページ参照。
 (19) G. Bancroft to M. Van Buren, Boston, May 2, 1844. op. cit., *M.H.S. Proceedings*, p.426.
 (20) G. Bancroft, "Oration Commemorative of Andrew Jackson." 1845. *Literary and Historical Miscellanies*. 1855. p.446., p.464. etc.
 (21) G. Bancroft to Louis McLane, Washington, Jun 23, 1846. or, G. Bancroft to Col. J. G. Harris of Nashville, Aug. 30, 1887. etc. D. Howe, *Letters*, op. cit., p.285., p.294.

第2章 オレゴン問題における貢献

1845年3月5日、海軍長官に就任したバンクロフトが、まず当面した重大案件は、イギリスとの間に蟠るオレゴン問題であった。「オレゴン地方に対する我々の権利は、明白にして疑問の余地なきものである。……我々の法による管理と我々の共和政体による利益とは……この遠い地域に居住せるわが民衆の上にも拡大されねばならない⁽¹⁾」——永年の米英間の紛争を一挙に険悪化させたポークのこの有名な就任演説が行われたのは、正にバンクロフト着任の前日のことであった。この声明は、1827年の協定による共同領有条約の廃棄通告を機に、北緯54度40分までの全オレゴンに准州政府を設けんとする法案が、前任大統領J・タイラーによって拒否されてから、僅か1ヶ月も経たぬ時期に発せられたものであった。イギリス側がこれを露骨な挑戦、あるいは威嚇と受取り、憤激の極に達したのは無理からぬことであろう。4月に開かれた英国々会では、帝国の威信にかけて合衆国の野望を粉碎するべ

く、R・ピール首相はオレゴン確保の決意を野党に披瀝し、直ちに4万の海兵派遣の動議が可決される有様であった⁽²⁾。一時期、開戦ムードが充満したことは紛れもない事実だったのである。

このようにさし迫った状況を、当事者となったバンクロフトはどのように判断し、どのように対処しようとしたのであろうか。1つの重要な手掛りとなるのは、両国間の情報流通の要ともいべき当時の駐英公使が、ハーバード以来の親友エドワード・エヴァレットであったという事実である。彼が公私にわたるこの友人からの通信によって、英外相アバディーン以下の秘められた真意をいち早く察知し、その都度ポークに有効な助言を与えていたであろうことは、次の1書簡からも容易に想像しうるであろう。

「……数週間前にもE・エヴァレット氏より来信があった。それはオレゴン問題に関してアバディーン卿に手紙を送る許可を、大統領に求めたものであった。私は彼の要求を私自身からのものの如くにして、口頭で大統領に伝えた。……私個人としては、イギリスが公正な基礎に立って、全問題の最終的かつ平和的解決を計るはずだと期待している……⁽³⁾。」

4月の国会では野党のクラレンドン卿やジョン・ラッセル卿の強硬論に突上げられて、断固たる措置を言明していたアバディーンではあったが、彼は元々オレゴン自体に大した価値を認めておらず⁽⁴⁾、そのような土地のために、中央カナダを危険に晒してまでアメリカと戦うつもりはなかった。外相就任以来平和協調を掲げ、数々の境界紛争を抱えた米英関係の調整に乗り出していた彼にとって、オレゴンの処理は、いわばウェブスター＝アシュバートン条約の補完事項にすぎなかった。それは帝国外交問題としては少くとも「最重要事項」ではなく、「愛国心上の仮想の価値⁽⁵⁾」に拠るプライドの問題であったと言えよう。なぜなら、オレゴンとテキサスの動勢に関して、イギリスが最も警戒したのは、すでに70才を超えていたルイ・フィリップ歿後のフランスの出方であった。アバディーンへの私信でピール首相は、「オレゴンに起因する合衆国との戦は、フランスとの戦争を誘発する萌芽となりかねない⁽⁶⁾」と忠告している。オレゴン問題は正にそれ自体によってではなく、英仏関係悪化のファクターとしてのみ重要視されていたに過ぎない。従ってアバディーンは、国民や野党が明らかな損失と感じない程度の、かつ大英帝国の威信を損ねぬ程度の、譲歩的な早期解決を望んでおり、その意味で公平な第三者による仲裁々定方式を、繰返し提案したのであった。「イギリス政府はどんな条件でも、とにかくこの問題から離れることを希望している。即ち、もし仮に仲裁者が全オレゴンを合衆国に与えたとしても、我々は異議なく裁定に従うであろう⁽⁷⁾」。45年12月のこの申入れは、彼の仲裁々定方式に託そうとする並々ならぬ期待を示すものと言ってよい。

この目的達成のためには、まず興奮せるイギリスの国内輿論を慰撫する必要があった。アバディーンが国民にオレゴンの無価値さを知らしめ、隣接原理による49度分割案を納得させようと、ジャーナリズムを最大限に利用したことは、夙にF・マークの指摘した所である⁽⁸⁾。その方法を提案し、アバディーンの後押しを得て、その実行に重要な役割を果たしたのが公使エヴァレットであった。従って各社説の内容や、それが世論に与えた効果などは、逐一彼を通じてワシントンへ報告されていたのである⁽⁹⁾。バンクロフトは、さし当ってこのエヴァレットの努力を支持奨励する一方、ポークの意を受けて、急場打開の対英特命全権大使に、元大統領M・ヴァン・ビューレンを担ぎ出す工作に働いている⁽¹⁰⁾。こ

の計画は、ヴァン・ビューレンの固辞によって成功しなかったとはいえ、バンクロフトが國務長官J・ブキャナンと並んで、ポークの対英政策の重要なブレーンとなっていたことは間違いがない。1845年7月12日、ポークは駐米公使R・ペークナムに対し、オレゴン分割に関する妥協案を提示し、公式交渉の第一歩を踏み出そうとした。その内容は49度線を太平洋まで延長することを基本とし、同線以南のヴァンクーバー島の自由諸港をイギリスに与えるというものであった。前回の26年交渉案より明らかに強腰のこの提案に対し、ペークナムが「公明正大と公平さを欠き、かつイギリス政府の当然の期待と両立せず」として、本国への照会もなしに断固拒否したこと⁽¹¹⁾は、事態紛糾の1因として著名である。

態度を硬化させたポークは、改めて全オレゴンに対する合衆国の権利を主張し、必要とあらば一戦も辞せずとして⁽¹²⁾、以後のイギリスの動きを一切無視する姿勢に出た。基本的にはポークの強硬姿勢を認めていたバンクロフトは、しかし、より慎重に交渉の窓口を維持しようとするブキャナンに期待していた。彼は万一を考慮して、12月、マザトランに在ったJ・D・スロート麾下の太平洋艦隊に北上を命じ、ウイラメット・バレーの開拓者保護に当らせようとした⁽¹³⁾。しかし冷静な海軍長官の見地からは、この地域におけるイギリスの弱点を適確に見抜いていたと言ってよい。彼は、英海軍は優勢を恃んではいても、過去のヌートカ・サウンド荒廃の前例もある如く、たとえオレゴン全域を一時的に制圧したとしても、やがてその保持能力の欠如に気付くはずだと考えたのである⁽¹⁴⁾。その点からも彼は、平和的解決の到来を信ずることが出来たのであろう。45年末、新年度の海軍予算は、彼の省内改革による冗費削減の効果もあって、この危機下にもかかわらず、実に前年度額の3分の2に切り詰められていたのである⁽¹⁵⁾。しかしながら、交渉の形式については、彼もポーク同様、イギリス側の固執せる第三者による仲裁々定方式には反対であった。12月27日にペークナムを通じて再度申込まれた、アバディーン仲裁提案が又拒否された時、バンクロフトは、「私はイギリスと合衆国という2大文明国の全権大使以上の、優秀な仲裁者は知らない⁽¹⁶⁾」と述べて、両国の直接交渉による妥協を希望している。蓋し彼にとってもオレゴン問題は、軽々しく他人まかせには出来ない最重要案件であったのである。

この間合衆国内では、2大政党間の対立感情と、各々の党を分裂させかねないセクショナルな欲望との間に、戦争か妥協かの結論は揺ぎ続けていた。しかし、メキシコとの開戦が必至となり始めた46年2月頃より、J・C・カルフーンや、T・H・ベントンらの妥協論が連邦議会内に高まり始め、4月、議会は1年後の共同領有終結を、妥協の余地を残した友好的修辭で通告することを承認したのである。バンクロフトは、ホイッグとは異なる彼なりの妥協の限界線を堅持しつつ⁽¹⁷⁾、この後の協定案はあくまでイギリス側から出されるべきだと主張している。そして、もしイギリスが49度線分割を基本とする新提案を持出しさえすれば、ポークはそれを上院に回付し、上院の8～12名を除く全員が、その案に賛成するであろうと予測していたのである⁽¹⁸⁾。彼はこの判断を、エヴァレットの後任の駐英公使ルイス・マクレーンに書送った。この公使からの示唆を得たアバディーンは、直ちに協定案の作成に着手し、その案文は6月6日にワシントンに届いた。多少の曲折があったにしても、6月15日にオレゴン協定は成立し、3日後、41対14票の差で上院の批准を得たのであった。票数に僅かな誤差が

あったといえ、事態はほぼバンクロフトの予想通りに運んだといってよい。

オレゴン問題へのバンクロフトの貢献は、実は此处で終わってはいない。この46年協定の分割線の規定は、ロッキー山脈以東の49度平行線を海岸まで延長し、更にヴァンクーバー島と大陸を分つ「海峡の真中の線」に継いで太平洋までを区切るというものであった。注意深く条文を検討したバンクロフトは、そこに1つの欠点を発見した。即ち、ヴァンクーバー島と大陸を分つ海峡の中には一群の島々が存在し、協定線はその小群島の東側を走るロザリオ・ラインと、西側のハロー・ラインのどちらを指すものかが曖昧であった。彼はその時点では異議を挿し挟まなかったが、海軍に命じて双方の水深を測定させ、島々を合衆国側に所属させるはずの西側の水路こそより深く、かつ主たる海峡であることを示す海図を作成させておいたのである⁽¹⁹⁾。その折彼が危惧した通り、59年のサン・ファン島事件を筆頭に、この島々の帰属を廻って、米英間に再び紛争が続くに及んだことは識者の知る所であろう。1871年に至り、両国はその解決に乗出すこととなる。当時駐独大使としてベルリンに在ったバンクロフトは、國務省に全権を委ねられて、イギリス側代表のプレヴォ提督と対決した。彼は満々たる自信をもって今度は仲裁々定方式を主張し、裁定者に独帝ヴィルヘルム1世を選んだのであった。結局、26年前の海軍用海図と、48年の英側の公的記述⁽²⁰⁾とが決め手となって、翌72年10月、ヴィルヘルムは全面的にアメリカ側の要求を容れた裁定を下した⁽²¹⁾。偶々、ドイツ統一を廻る英独間の悪感情の存在という国際的事情が、暗々裡にアメリカに幸したのも事実であろう。ともあれここに、永年のオレゴン問題は最終的に結着を見たのである。海軍長官時代以来のバンクロフトの、関りの深さを知るべきであろう。

註

- (1) James D. Richardson, "Messages and Papers of the Presidents," IV. p.381. cited from Frederick Merk, "British Government Propaganda and the Oregon Treaty." *American Historical Review*, XL, 1934, p.38.(以下, Propaganda と略す)
- (2) James O. McCabe, "Arbitration and the Oregon Question," *The Canadian Historical Review*, XL1, No.4., 1960. p.314., or, F. Merk, *Ibid.*, p.39.
- (3) G. Bancroft to Louis McLane, Washington, Dec. 12, 1845. D. Howe, *Letters*, op. cit., p.281.
- (4) アバディーンはこの地を「松林の沼沢地」と見、耕作に適さず、49度以南の沿岸に良港は期待出来ず、コロンビア河も、カナダから太平洋への出口として交易の大動脈となるには、種々の自然的障害が多すぎると考えていた。
J. O. McCabe, op. cit., p.308. or, F. Merk, op. cit., p.39.
- (5) J. O. McCabe, *Ibid.*, p.308.
- (6) R. Peel to G. H. Aberdeen, Oct. 17, 1845. cited *Ibid.*, p.323.
- (7) *Ibid.*, p.320.
- (8) Cf, F. Merk, op. cit., "Propaganda." pp.38--62.
- (9) *Ibid.*, pp.43--45., p.57. etc.
- (10) G. Bancroft to M. Van Buren, Washington, May 5, 1845. M.H.S. *Proceedings*, op. cit., pp.441--443.
この時のバンクロフトの依頼は、5月12日付の丁寧な言辞による返信で謝絶されている。
- (11) J. O. McCabe, op. cit., p.317.
- (12) Milo M. Quaife, ed., "The Diary of James K. Polk." 1910. Vol.1., p.4. (26th August, 1845) —以下, Polks Diary と略す。
- (13) Lilian Handlin, op. cit., p.215.
- (14) G. Bancroft to William Sturgis. Washington, Aug. 25, 1845. D. Howe, *Letters*, op. cit., p.279.

(15) C. G. Sellers, op. cit., p.358.

(16) G. Bancroft to Charles Sumner, Washington, Jan. 13, 1846, D. Howe, Letters, op. cit., p.266.

(17) G. Bancroft to Louis McLane, Washington, Mar. 29, 1846. Ibid., p.283.

彼はこの書簡で、自分は全交渉期間中、全く意見を変えていないと断り、妥協の限界は、コードラとヴァンクーバー島を譲って49度線での分割。それと7～10年間のコロンビア河の航行権の承認までとしている。そしてこの河の永久航行権を譲ろうとするホイッグを非難している。

(18) Ibid., p.284.

(19) Russel B. Nye, op. cit., pp.156—157.

(20) 1848年、駐英大使であったバンクロフトは、パーマストン卿と原初の協定文について論じ、ハロー・ラインを国境と認めさせた上で、その作図を記録に留めさせていた。

(21) R. B. Nye, op. cit., p.275.

第3章 対メキシコ問題における役割

1840年代の膨張主義の展開の中で、当時の海軍長官としての関与が、オレゴン問題のみで終る筈がなかったのは言うまでもない。その北西部領域をどう加えうるかの兼ね合いは、直接的、間接的にテキサス、カリフォルニアの問題と複雑に絡み合い、ほとんど時を同じくして、諸地域関連の問題が存在したのは周知の事実である。例えばテキサスは、ポークのかの、全オレゴンに対する明白な権利声明の僅か3日前、前大統領タイラーが両院の共同決議に署名して、併合が成立したばかりであったし、その事後処理はメキシコとの間を険悪化させ、国内の様々な欲望や、英・仏の思惑なども絡んで、オレゴン問題の解決を牽制する有様であった。すでに45年5月、W・L・マーシイの突然の辞任によって、陸軍長官代理をも兼ねるに至ったバンクロフトは、軍部の最高責任者として、諸地域の関連をどのように把握し、どのような処理をしようとしたのであろうか。

前述の如く、就任早々ポークにその4大目標を告げられ、カリフォルニアを含む太平洋岸一帯の領域化に賛同していた彼は、大貿易港ボストンの元収税関長としての経験からも、ニューイングランド商人層の沿岸諸港に対する欲望については、兼々熟知していたと言ってよい。彼らにとってそれらの諸港は、単に北太平洋捕鯨業の有力基地であるのみならず、ハワイから中国へ至る太平洋貿易の最良の拠点であった。殊に42年の南京条約、44年の望厦通商条約によって、清帝国の門戸が開かれつつあったこの時期、中国貿易の利は一段の光彩を放って目に映じていたに違いない。メキシコ領の1辺境たるカリフォルニア、就中サンフランシスコ、モンテレー等の良港は、そのために是非とも入手したい垂涎の地であった。これらを外交交渉によって獲得しようとする動きは42年当時から存在していた。E・エヴァレットはその希望をイギリス使節のアシュバートン卿に語ったし⁽¹⁾、D・ウェブスターは既述の「3者構成プラン」という形で、実際に協定の場に持出したのである。この計画は結局日の目を見ずに葬り去られたが、第1章にも記した如く、当時野に在ったバンクロフトがその内容を察知し、1つの手掛りとして注目していたことは明かである。このようにカリフォルニア問題は、彼の頭の中においても、早くからオレゴン交渉と一体のものとして絡み合っていたといえよう。殊にオレゴン紛争の進展過程において、当初太平洋貿易と大陸を結ぶ大動脈と期待されていたコロンビア河が、到底その任に耐えぬものであり、その河口港をも含めて、ファン・デ・フーカ海峡以南、サンフランシスコ

コまでの間には、恃むべき良港なしと判明する⁽²⁾に及んで、カリフォルニアに対する愛着は熾烈の度を加えるに至ったのである。同じ欲望は当然オレゴンでの交渉相手たるイギリスにも存在したし、米・英両国が最大の脅威として警戒を怠らなかったフランスにも存在した⁽³⁾。事實はともかく、両強国がカリフォルニアに干渉するかも知れぬ気配は、モンテレー駐在領事T・O・ラーキンなどによって、屢々報告されていたのである⁽⁴⁾。

諸国の機先を制するには、軋轢の続いているメキシコの出方如何にかかっていた。両長官兼務のバンクロフトとしては、依然不確定な国境線や、太平洋岸一帯に目配りをし、万一の予防措置を考へざるを得なかったであろう。彼は45年6月、陸海両軍の将に重要な指令を発している。1つはジェサップに駐屯中のザカリー・テラーに対する、テキサス西境への前進命令であり⁽⁵⁾、今1つは太平洋艦隊司令J・D・スロートへの、サンフランシスコその他の諸港の封鎖と占領の準備を命じたものであった⁽⁶⁾。この年の9月、彼は大統領と共に、極秘にJ・スライデルをメキシコに派遣することを提案して閣議の諒承を得た。この特使の任務は米墨間の恒久的国境を確定し、アパー・カリフォルニアとニュー・メキシコを、直接交渉によって購入せんと意図したものであった⁽⁷⁾。バンクロフトは又、これと併行して、上院の軍事委員会議長T・H・ベントンと計り、その義息J・フレモントの第3次探検隊をカリフォルニア・オレゴン地方へ送り込んでいる⁽⁸⁾。この一隊がバンクロフト等の口頭命令を逸脱して行動した嫌いがあったにもせよ、カリフォルニア住民のメキシコからの、自発的分離を煽動するための工作隊であったことは、今日大方の認めるところであろう。45年末頃、オレゴン交渉は危機を迎えていたが、彼はあくまでイギリスとの開戦はないと楽観しており、メキシコから海軍省に入る各ルートからの情報も、相手は買収に応ずるであろうと思わせるものが多かった。彼は「ヨーロッパ諸国がこの交渉に気付く前に……」、一切の用件が片づくことを密かに期待していたのである⁽⁹⁾。カリフォルニア獲得を目指した彼の詳細な計画は、この一連の言動からは些か判りにくい、買収の成否に関らず、「地域住民の直接投票という形で、連邦への自発的併合実現を策していた⁽¹⁰⁾」とする、L・ハンドリンの見解は恐らく正しいであろう。なぜなら、前述のフレモント隊派遣の意図や、サンフランシスコ占領直後のJ・D・スロート宛の訓令の1齣などからも、その真意は略々うかがえるように思えるからである。

「……平和が実現し占領地保有の基盤が確立したならば……市民政府樹立の必要が生ずるであろう。……公職に着くべく選ばれた人々にとっては、この地域における権限の現所有者（軍司令官）に対すると同様に、当然の敬意がカリフォルニア住民の願望に対して払われるべきである。権限を委託されたこれらの人々から、合衆国への忠誠の契約を求めることは妥当であろう⁽¹¹⁾」。

しかし46年1月になると、メキシコへ派遣されたJ・スライデルは、エレラ大統領によって受入れを拒否され、それが契機となって勃発したパレデス將軍の革命に逢って、凡そその任務は失敗の様相を呈していた。バンクロフトはポークの意図に従って艦隊をマザトランに集結させ、Z・テラー軍をリオ・グランデ・デル・ノルテへ進出させた。彼は混乱のメキシコに対するこの示威が、住民に内外に対する平和を望む声を増大させる筈と考えていたのである。事実彼は3月下旬の時点で、L・マクレーン宛に、メキシコ国境とその沿岸に、攻撃を阻むに十分な兵力を配置したことを告げた上で、

「メキシコに関する事件は大変うまく運んでいるように思う。……平和への期待はこれまで以上に高まっている……⁽¹²⁾」と記したのであった。

けれども、ポークの判断と態度は少し違っていた。英・墨両国との交渉が双方共に行詰っていることに劫を煮やした大統領は、4月25日の閣議に、オレゴン共同領有終結通告の件と合せて、メキシコに対する「無益な和解の試みを終らせ……大胆かつ断固たる手段を取るべき——⁽¹³⁾」ことを提案している。偶然にもこの日起きたマタモラスにおける最初の衝突の報は、5月9日午後6時にポークの許に届いた。連邦政府がその飛報以前に、議会への対墨宣戦教書の提出を決定していたことは、後世の論難する所であるが、あくまでも和解の機会を望んでいたバンクロフトは、閣僚中唯一人、最後まで開戦に反対を表明し続けたのである⁽¹⁴⁾。

しかし宣戦が布告された後は、彼は全面的にポークの側に立った。5月13日、英・仏の干渉を心配したブキャナンが、「開戦に当ってアメリカは、カリフォルニア、ニューメキシコその他、メキシコ領のいかなる地域をも入手する意図を持たず」とする回状を、諸外国に発せんと主張して大統領と対立した時、バンクロフトはその必要性を否定した⁽¹⁵⁾。彼は英外相アバディーンのオレゴン問題に対する本意や、メキシコとの開戦に関する英ジャーナリズムの無関心さ⁽¹⁶⁾などからも、英仏の軍事介入はしないと信じる事が出来たのであろう。それよりも彼にとっては、1年半に及ぶ外交的・戦略的努力を無有に帰し、郷党ニューイングランド関係者の積年の望みを自ら打ちくだくような、カリフォルニア放棄宣言など、もっての外のものであったに違いない。開戦早々そのカリフォルニアを確保するために、5月15日、彼はスロート提督に「間違いなくサンフランシスコを取り、マザトラン、モンテレー、更に可能ならばグアイマスを占領せよ」と命じた。そのためにビドル提督麾下の東洋艦隊を援助に呼び寄せ、大西洋から「ポトマック」「サラトガ」の2艦を回航させたりしているのである⁽¹⁷⁾。しかし、当時の情報伝達速度の遅さとスロート自身の遅疑峻巡から、この日の指令によって、スロートが実際に行動を起したのは大分後であった。従ってバンクロフトは6月8日、再び同趣旨の命令書を送り、併せてカリフォルニア占領地域住民の合衆国に対する友好的関係を醸成し、将来、望ましき移住地域となるよう働きかけることを命じている⁽¹⁸⁾。この時期の一連のスロート宛の命令書や、同じ頃太平洋貿易に関していた友人のボストン商人、サムエル・フーパー宛の書簡などは、カリフォルニアに賭けたバンクロフトの期待が、並々ならぬものである事を如実に示していると言ってよい。

「……私はカリフォルニアが今や我々の所有物であり、決して放棄さるべきではないと希望している。我々は不精無精戦争に駈り立てられたのである。我々は強固な平和をもたらさねばならない。その平和こそ、極西部を宗教的自由、政治的諸権利、教育・通商・工業に開放するであろう。君がボストンからサンフランシスコまで、鉄道と蒸気船で横断できる時代が到来するのだ⁽¹⁹⁾」。

この書簡において彼は、予測される国境に関するフーパーの質問に答えて、「メキシコが今月(6月)中に講和を結ぶならば、リオ・デル・ノルテと35度平行線が国境となるであろう。それより後なら、サンディエゴを含む32度線となるに違いない」と記している。そして7月12日付の命令書において、スロートにサンディエゴ奪取を命じた⁽²⁰⁾のであった。スロートは7月7日にモンテレーを抑え、同9日にサンフランシスコを占領したものの、最初に状況判断を誤って悉く指令に立遅れた彼は、この時

点で病を理由に司令官辞任を申し出た。期待が大きかっただけにバンクロフトの怒りは激しく、8月13日のスロート宛の通達では、「誤を犯すまいとする貴官の心配が、結局貴官を、最も不適當にして最も許し難い怠慢に追込んだのだ」と決めつけたのである⁽²¹⁾。太平洋艦隊の指揮権は直ちにR・ストックトン提督に移譲された。かくてこの後は、新司令官下の海上勢力と陸路西進したS・W・カーニー准将の西部連隊、及びカルフォルニア義勇軍を率いたJ・フレメントとの、3者協力の下に、当該地の征服が完了することになるのである。

1846年の末頃にはカルフォルニア獲得作戦は略々終了しつつあったが、個々の動勢の多くはバンクロフトの了解なしに行われ、その中の幾つかには明かな訓令違反もあった。遠隔地の戦を統御する困難さ、彼の早期戦争終結案に対する、議会の頑迷なまでの空論的反対、奴隷制拡大の是非を廻る2大政党内部の深刻な亀裂などは、次第に彼の意欲を削いで行ったように思える。この年の夏頃には彼は休息を欲し、元々彼は海軍長官職などよりも外交官ポストを望んでいたことをポークに思い出させた⁽²²⁾。丁度オレゴン協定も解決した後であり、その功労者L・マクレーンの駐英公使辞任を機に人事の改造を行ったポークは、バンクロフトに駐英特命全権大使のポストを与えたのである。この任命は9月9日に発令され、ここに彼の軍事指導者としての時代は幕を閉じたのであった。その期間は僅か18ヶ月の短時日ではあったが、それは咆吼する40年代の膨張のピーク時に当っており、しかも陸軍長官代理をも兼ねて、全軍の最高責任者としての役割を果たした彼の活動は、真に大なるものがあったと言う他はあるまい。

註

- (1) A. B. Ashburton to G. H. Aberdeen, No.2, Apr. 25, 1842. cited F. Merk, op. cit., "Negotiations," p.395.
- (2) F. Merk, op. cit., "Propaganda," pp.45—46., p.47.
- (3) イギリスが、L・フィリップとF・ギゾーの後継者とその出方に深刻な不信を抱いていた事は、前出のR・ピールの書簡からも明らかである。(J. O. McCabe, op. cit., p.323.)
その不安はアメリカも同様で、バンクロフトも、「……ギゾーは今度は、イギリスに道理があるなどと声明して、……わが連邦の境界を狭め、敵対勢力を作り出そうと画策しているのではないか？」と懸念を述べている。
G. Bancroft to C. Sumner, Washington, Jan. 13, 1846. D. Howe, Letters, op. cit., p.266.
- (4) Ray A. Billington, "Westward Expansion," 4th edition, 1974. p.485.
45年5月には在墨エージェント、W・S・パロットより、英太平洋艦隊の増強その他の動きが、7月10日にはレーキンより、米の反乱工作抑圧を目的として英の有力2商会に援助金が与えられた事や、ハドソン湾会社の進出、英領事の任命等が伝えられた。
- (5) G. Bancroft to Zachary Taylor at Ft. Jesup, La. June 15, 1845. D. Howe, Letters, op. cit., p.288.
- (6) G. Bancroft to Commodore John D. Sloat, Commanding U. S. Naval Forces in the Pacific, U. S. Navy Department. Washington, June 24, 1845. op. cit, Memorial, C.H.S., p.8.
- (7) M. M. Quaipe, ed., op. cit., "Polks Diary" Vol.1., p.34.
- (8) R. A. Billington, op. cit., pp.487—488. or, R. B. Nye, op. cit., p.152.
- (9) G. Bancroft to L. McLane, Washington, Dec. 12, 1845. D. Howe, Letters, op. cit., p.280.
- (10) L. Handlin, op. cit., p.214.
- (11) G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep, July 12, 1846. op. cit., Memorial, C.H.S., pp.14—15.
- (12) G. Bancroft to L. McLane, Washington, Mar. 29, 1846. D. Howe, Letters, op. cit., p.282.
- (13) M. M. Quaipe, ed., op. cit., "Polks Diary" Vol.1., p.354.

- (14) Ibid., p.385.
 (15) Ibid., pp.397--399.
 (16) Richard S. Cramer, "British Magazines and the Oregon Question." Pacific Historical Review, XXX11, 1963. p.381.

イギリスの各誌はオレゴン協定の結果にほぼ満足しており、妥協をもたらしたアメリカ側の内部事情や、対メキシコ戦争との相関々係には無関心さを示し、それについて論評を加えた例は見られなかった。

- (17) G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep, May 15, 1846. op. cit., Memorial, C.H.S., pp.11--12.
 (18) G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep, June 8, 1846. Ibid., p.13.
 (19) G. Bancroft to Samwel Hooper of Boston, June 16, 1846. D. Howe, Letters, op. cit., pp.290--291.
 (20) G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep. July 12, 1846. op. cit., Memorial, C.H.S., p.14.
 (21) G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep. Aug. 13, 1846. Ibid., p.17.
 (22) G. Bancroft to James K. Polk, Jan. 1, 1845. D. Howe, Letters, op. cit., p.262.

「キャビネット内のポストは、現在の私には最良の職とは思えない。私の多年に渡る綿密な注意と、継続せる調査は、私が着手した合衆国史を、出来るだけ早く完結させるべきだとの公衆の要望を生み出した。イギリスかフランス、あるいはドイツにおける外交官職こそ、望ましい唯一のものである。……貴下が外交団編成を行う場合、プロシア公使のポストを用意して下さいれば、私は喜んで受諾するつもりである。」

む す び

リベラリズムとナショナリズムが、19世紀の世界的潮流であったことは言うまでもないが、アメリカでも、1830年代から40年代の間に、デモクラシーと領土的膨張主義とは矛盾しないとする考え方が、同時代人の間に一般化していたと認められよう。正にその時期に政界に登場したバンクロフトがいわゆるマサチューセッツ・ラディカリズムに献身中の当初から、その膨張主義的関心を折に触れて表明していた事は、第1章に叙した通りである。その意味では彼も亦時代の子であったという他はないが、その膨張論的志向は、彼の堅固な民主哲学上の信条と、40年代に至り不充分のまま終りかねない改革運動の行末への不安とに、強く裏付けられていたと見る事が出来る。1840年のホイッグの勝利が党に失望と混乱を与え、デモクラット左派は、それまでの政策制御の影響力を失いつつあった。そしてアメリカの社会は、独占とアリストクラシーの悪影響を克服するという、彼が目指していた方向へ向っているとは到底思えなかったのである。バンクロフトにとっては、この歪みを匡正し、「最初の原理のエネルギーに立ち返らせうる——⁽¹⁾」ものこそ、新たに獲得される末開の新天地であるべきであった。新領土はジャクソニアンの伝統を完成に近づけてゆくための、新たな国民的努力の場と観じたが故に、彼には全ての対象地が同じ価値を有していた。従って諸地域への膨張は現実の複雑な相関々係とも絡んで、一連不可分のものとして把握されていたのである。その点同じ膨張主義を採ったとはいえ、常にセクションの利害や奴隷制拡大の是非の見地などから、一方に賛成しても他の地域には反対するという動きを見せた人々、例えばカルフーン＝タイラー系の一派や、J・Q・アダムズ、S・アレン等の超オレゴン派の面々などとは明らかに違っていたと言ってよい。ポーク政権に参画する以前から、彼の膨張主義的関心が、常に全国的観点に立ってのものであったことは、本文中の彼の言動が立証する所であろう。まして海軍長官就任早々、密かにポークが示した4大目標は、全ての項目において彼の期待に一致するものであった。以来彼は、閣僚中の海外事情通の第一人者としてポークの耳目とな

り、その政策決定の有力な助言者ともなったのである。そして海陸兼任の最高軍事指導者としては、極めて現実的かつ積極的に事を処して、40年代膨張の成果のほとんどのお膳立てを仕上げたのであった。

今1つ、バンクロフトの信念としての膨張論の特色は、アメリカ国民をあくまで全民族間の「選民」と見、その彼らが「神の手の導き」に従って、自由と倫理性を世界にもたらす義務を負うが故の拡大であるとする点にあった⁽²⁾。モラルを強調する以上、その過程において、いやしくも惨虐・野蛮な征服者との印象を留めることは、厳に慎まれねばならなかった。その彼が、一触即発のオレゴン交渉において強硬姿勢をとったのは、彼独自の広範な情報網から、平和的解決の実現を確信出来る範囲内においてであったと言ってよい。E・エヴァレット、L・マクレーン、W・スタージス等との度重なる往復書簡は、この時期の彼の心情を示すものである。又、彼が発火寸前のメキシコ国境やその沿岸に大軍を配したのは、戦争を予想してというより、むしろその示威によって、革命による内部混乱に悩むメキシコ国民に平和への希求を喚起し、それを望む勢力との和解が可能だと信じた故の、一種の外交上の戦略によるものであった。バンクロフトは、「メキシコ民衆の心は温和なしっかりしたものであった——⁽³⁾」が故に、君主政を押しつけようとするヨーロッパ諸国より、結局は民主的なアメリカの腕の中へ押しやられてくるはずだと考えていたのである。この発想があまりにも楽観的だとする批判はともかく、あくまで平和的解決を望んでいた彼は、45年にテキサス西境へ前進を命じたZ・テーラー宛の文書にも、同時にJ・D・スロートやメキシコ湾支隊のD・コナー准将宛の命令書⁽⁴⁾にも、一向専守防衛を訴え、繰返し挑発を避けることを命じていた。メキシコとの破局が迫った時でさえ、彼が最後まで開戦に反対したことは前述の通りである。「……私は戦争というものが、この文明世界において永久に流行遅れのものとなるよう願っている。少くとも私は、この野蛮な習慣が、アメリカ共和国と他国との関係に侵入しないことを、重ねて希望したい⁽⁵⁾」。開戦の前年、ニューヨークの1通信員に宛てたこの書簡は彼の心境の一端を覗かせていると言えよう。

しかし、既に戦争に突入した以上は、彼の職掌上からも最善の戦略を立て、それに従って行動せねばならなかったのは勿論であろう。太平洋艦隊宛の具体的命令なども矢継早に発せられたけれども、彼の命令書の後半には常に、戦場となる現地住民への配慮に関する注意事項が加えられていた。5月15日、サンフランシスコやモンテレー奪取を命じた書類には、「……貴官はこの与えられた好機に、合衆国政府に対するカリフォルニアやソノーラの住民の信頼をかちとるべきである。……そしてその住民に、中立・自治・友愛を助長せよ⁽⁶⁾」とあり、又、続く6月8日には、「……貴官は当該地方の住民が、わが国との親密なる関係に入るように努力せよ。……（その実効を挙げるべく）最善の手段を講じ、彼ら住民の繁栄を押し進め、わが国からの移住者にとって、この広大な地域を好ましき居住地となすべく努力すべし⁽⁷⁾」と記したのである。

このようなバンクロフトにとって、議会对策、戦争指導の両面において、思惑に反して長期化せるメキシコ戦争の成りゆきは、全く不本意なものであったと言ってよい。しかし敢えて言えば、その責任の一端は彼にも無かったとは言い切れない。戦を避けんとする過剰な配慮、例えば現地の責任者宛の「メキシコが宣戦をせぬ限り——⁽⁸⁾」というような制約が、スロート提督やT・O・ラーキン等の場

合には、情報入手の遅延から適切な対応に遅れを取る原因となり、それが結局、戦場での勝手な行動や命令違反という形に現われたのは事実であった。やはり彼はこの危急の場にあっても軍人ではありえず、その膨張策でさえ、彼独自の哲学上の理由に基づき、理想主義的色彩の濃いものであったと言う外はあるまい。これまで著作の中のみで表明されていたナショナリズムの感情が、膨張期の海陸の長官という立場を得て、一気に現実行動に転化したものと見てよいであろう。それだけに、彼自身の内面における矛盾はないどころか、むしろ年来の信条実現の好機として、勇躍その任に当たったとの感が強いのである。しかし現実の複雑さは屢々彼の期待を裏切り、学者肌の政治家としての限界を露呈せざるを得なかったのであろう。彼の在任期間の短かさはその証であるのかも知れない。

最後に本論文では、彼のこの時期の行動面に焦点を絞ったため、肝心のトランセンデンタリズム哲学との関連、「明白な天命」信奉の思想的根拠や同時代人の評価などについては、ほとんど触れる暇がなかった。それらの点については、稿を改めて詳しく考察してゆくつもりである。

註

- (1) George Bancroft, "Oration Commemorative of Andrew Jackson," 1845. *Literary and Historical Miscellanies*, N.Y., 1855. p.463.
「西部の男は靈感を受けた予言者として来た。……彼は旧習より正義を重んじ、確立された利害関係の圧迫から、最初の原理のエネルギーへと立ち返った。……」
- (2) 拙稿、「ジョージ・バンクロフト研究序説」前掲書。56ページおよび65ページ参照。
- (3) L. Handlin, *op. cit.*, p.215.
- (4) G. Bancroft to Commodore David Conner at Pensacola. Dec. 10, 1845. D. Howe, *Letters*, *op. cit.*, p.289.
- (5) G. Bancroft to Henry Wikoff of New York. May 12, 1845. *Ibid.*, p.288.
- (6) G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep, May 15, 1846. *op. cit.*, Memorial, C.H.S., p.11.
- (7) G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep, June 8, 1846. *Ibid.*, p.13.
- (8) G. Bancroft to Z. Taylor at Ft. Jesup. June 15, 1845. D. Howe, *Letters op. cit.*, p.288., G. Bancroft to J. D. Sloat, U. S. Navy Dep, June 24, 1845. *op. cit.*, Memorial, C.H.S., p.8. etc.